

俳句 大津俳句会

枝々を打ちつつ落つる木の實かな

井芹眞一郎

秋天に消えてしまひしホームラン

秋山 恵子

咲き満ちて誰も気付かず枇杷の花

市原 初女

祝膳^{しめ}メにいただくむかご飯

江藤 みち

菊花展中に色添へ子供席

大塚喜久子

阿蘇谷を埋めつくしたる稲の秋

坂本 セキ

コンサート聴きし余韻の夜長かな

佐賀 久子

山眠る噴煙に音なかりけり

原田 順子

木犀や風に色のせ香り立つ

堀川 妙子

一日の祈りのやうに秋の暮

松尾 昭雅

窓といふ窓開け放ち満たす秋

武藤 規子

人去りて靈氣漂ふ月の城

渡邊佳代子

俳句 つのはな句会

銀漢へ^{むく}^{たま}^{とら}の精とぶ兜太の国

星永 文夫

停電の夜の主役の金木犀

上杉 波

鴉啼いて四方に増やす絵空事

矢嶋 道子

尾瀬ヶ原 象の耳欲し秋の風

水野 春子

朱鷺^{とぎ}帰る里にはほのぼのわらべ唄

梅木トキエ

秋刀魚焼く煙の向うの母を呼ぶ

塚本 洋子

長き夜やページをめくる指乾く

酒井 豊美

来し方や葡萄の味を噛みしめる

志賀 孝子

S字フックに夏の想い出かけてある

田上 公代

憂さひとつ肩より抜ける紅葉狩

木庭 杏子

短歌 大津短歌会

伝えんと坊守さまのみ教えを

思い廻^{めぐ}れば思案に暮るる

管野 静

雲間よりこぼるる光鮮やかに

野草の丘の緑を照らす

豊岡ミツル

ラスト一周いよいよ昂^{たか}まる声援が

アンカーの子等の背^{せな}を押したり

渡辺佐代子

ひざに抱き飲ませ食べさせ話し掛け

老夫愛し寝たきりなるを

岩下 文代

痛ましき思い出多き八月の

月煌々と照る下に佇つ

吉永 恵子

吾れを見て飛び立つ二羽の雀かな

またこいよとぞ言いて見送る

小平 善行

短歌 万年青短歌会

この歳で初めて食べしにが瓜の

酢漬はうましと友に教ゆる

合志 妙子

原爆忌黙禱のまなうらに顫^たつ

史料館前の赤き花群

合志 桃花

脳トレに卒寿の年で奏でたる

タやけこやけに振るミュージックトン

山内 信子

飼いし仔犬声かれるまで啼くなれば

そい寝してやる夜の明けるまで

中山 春代

背にぬくむ秋日を負いてわれの影

道化師のごとおどけてみたり

大林 律

ゴーヤカーテン二階まで繁り実のあまた

「お持ち下さい」と門^{かど}ではどこす

磯崎テル子